夕張岳リゾート開発計画とその問題点！

夕張岳研究グループ

❖開発計画の経緯

本構想を最初に打出したのは、一九七八年八月札幌通産局長として着任した、寺田恵一氏であった。局長自身がスキーを得意とすることもあり、翌年三月に、三浦雄一郎氏を伴って夕張岳で山スキーを楽しんだ折に、ヨーロッパのスキー場に匹敵する良いスキー場となる旨コメントしたことが、当時の新聞に報道されたことに端を発し、その後、月刊雑誌にも取り上げられている。当時としては、とてつもなく大きな構想であり、地元自治体、市民とも夢物語として、いたって冷静に受けとめられていたようである。もちろん、一部の人達の間では、大きな関心も得たようであるし、同岳の固有高山植物の貴重さを知る人にとっては、大いに懸念されるところであった。

その後、夕張市の基幹産業である石炭産業の斜陽化で相次ぐ閉山により、衰退著しい同市では、企業誘致に積極的に取り組んでいたようであるが、炭鉱事故や斜陽の町の暗いイメージは、誘致に大きなマイナスとなっていた模様である。従って、市長はその後、地域振興策の一環として、「石炭の歴史村」をはじめとする観光事業に着手した後、事業の成功を危ぶむ声に対し、機会あるたびに、観光事業が究極の目的ではなく、本事業を通して、夕張市に明るいイメージを定着させ、もって企業誘致の促進に寄与させるものであることを強調している。

国土計画が本計画に参入した時期、いきさつは今一つはっきりしないが、夕張市側が仕掛人であることはまちがいないであろう。一九八三年八月には、堤義明社長がヘリコプターで夕張から大雪山にかけて空から視察し、スキー場計画の開発構想策定を部下に指示したという（月刊雑誌＝財界さっぽろ）。この後一九八四年三月には、トニーザイラーが、おしのびでヘリコプターで夕張岳山腹に降り滑降して雪質、景観の点で絶賛したという話が残っている。

その後も市、国土計画は、秘密裡に毎年何らかの調査を重ねてきているようで、一九八七年に至り、市の委託による気象状況、動植物の分布状況、自然景観への影響度、スキー場開設に伴う水質の変化等の環境影響評価調査を調査会社に発注している模様である（日本経済新聞　62・1・24付、62・2・16付、月刊クオリティ　62・7月号）。

一方、夕張市としては、一九八二年の北炭夕張新鉱の廃山以来、夕張市存亡の鍵をにぎるものとして観光開発に一層力を入れてきた。むしろ直面した危機を逆手にとり、この機を千載一遇のチャンスととらえ、夕張岳開発も、この機をのがしては考えられないというあせりにも似た気持は、昨今の情勢からして十分予想できる。一九八七年十月の北炭真谷地炭鉱の閉山以来、残る夕張市内唯一の炭鉱、三菱南大夕張鉱の存続も危ぶまれる中で、夕張岳を中心とした、大規模リゾート開発も、閉山になってからでは遅いという地元の声があるという。

このような情勢の中で、一九八八年度政府予算の復活折衝で、夕張岳周辺の大規模リゾート開発に対し、通産省・資源エネルギー庁の産炭地振興策の一環として、事業化促進補助金が認められたことにより、地元夕張市は、開発促進に弾みがつくと期待しているようである（特定産炭地域拠点開発基礎調査

費三千万円、産炭地域大規模プロジェクト事業化促進調査費七千万円）。

❖夕張岳の動植物相

植物相

夕張岳（標高一、六六七・八メートル）は、夕張山地の中央部に位置する花の名山である。北方圏の植物地理学で世界有数の学者であった故舘脇操北大名誉教授は、北海道で所産高山植物が多く、お花畑も立派な貫録のある名山として日高アポイ岳、夕張岳、大雪山塊、利尻岳をあげ、どれをとっても、高山植物産地の粋といわれる世界的に堂々たる存在であると讃えている。

あらためて、これらの山の保護の状況を概観すると、アポイ岳は「アポイ岳高山植物群落」が国の特別天然記念物に指定されているほか、一九七三年に発見された蝶の一種、「ヒメチャマダラセセリ」が国内で同岳にのみ産することから、同じく天然記念物に指定され、さらに、日高山脈襟裳国定公園内にあって、監視の目も行届いている。

大雪山塊は国立公園として、広い区域が、特別保護地区等とされているほか、ウスバキチョウ、アサヒヒョウモン、ダイセツタカネヒカゲ等の氷河期の遺存種を産し、国の天然記念物に指定されている。

また利尻岳は、利尻礼文サロベツ国立公園に指定され、固有植物もあり、特別保護地区等の指定もされ保護されている。

しかるに夕張岳は、古くから多くの植物学権威者の注目をひき、数多くの論文があるにもかかわらず一九五五年四月に道立自然公園の指定を受けるまで高山植物の保存には全く手がつけられなかった。このような事態に対しては国・道はもとより、地元自治体・住民の責任も大きいといわざるをえない。前述のアポイ岳等と比較して全く遜色のない夕張岳の高山植物は相当以前に、種または地域を国指定の天然記念物に指定して然るべきものであった。道立自然公園に指定されて以後も盗掘は続き、レンジャーの必要性を痛感すると共に、登山者による湿原の荒廃が続き木道の設置が最も急がれているところである。夕張岳では、標高およそ一、三〇〇mで森林限界となり、これより上部が、同岳を象徴する高山帯となり、岩峰の壁や、蛇紋岩崩壊地、湿原などに多くの固有植物が生育している。

一九一三年（大正二）武田久吉博士が、新種ユウパリコザクラを記載発表（Notes on the Japanese Primulas. Notes Roy. Bot. Gard. Edinb. 8：94 (Pl. 25)）して以来、数多くの固有植物が夕張岳から記載され、その後の研究で現在は、十二種が固有植物とされている。和名に「ユウバリ」・「ユウパリ」を冠する植物も多く、現在では十二種が数えられている。

夕張岳の植物に関する文献は、非常に多く、総合的なものとしては、西田彰三氏の「夕張山脈植物分布論」（札幌博物學會會報　一九一八～一九年）、草下正夫氏の「夕張嶽御料地に於ける垂直的植物分布に対する森林生態学的考察」一（御料林一四一及び一五二号、一九四一及び一九四二年）、豊国秀夫氏の「北海道の超塩基性岩植物に就いて」三（北陸の植物、一九五六年）、野坂志朗氏の「北海道石狩夕張岳種子植物誌予報」（北陸の植物　一九六〇～六二年）、広江美之助「夕張山の蛇紋岩植物」（植物分類地理、一九五二年）などがあり、このほか前述の武田久吉をはじめ、宮部金吾、工藤祐舜、舘脇操、中井猛之進の諸博士などによる新種の発表が数多く行われている。

この内でも、西田氏の「夕張山脈植物分布論」は一九一八～一九年に書かれたもので、夕張岳の植物のバイブル的存在である。当時、登山道は整備されておらず、恐らく想像を絶する苦難の中で登山し、夕張岳の中生層と蛇紋岩にともなう所産植物が極めて興味あることを指摘しているのである。

昆虫相

一方、夕張岳における昆虫の研究の歴史は浅いが一九五六年以来の多くの調査記録があり、それらによれば、山麓から山頂の間で、蝶類五一種、蛾類四八三種、カミキリ類二六種などが知られている。このうち蝶類では、道内でも日高山脈と夕張山地からのみ知られるツマジロウラジャノメが標高一、〇〇〇mの岩峰にわずかにみられる。また同所には、ユーラシア大陸の北部寒冷地に広く分布し、北海道では、道東に産地の多いカラフトタカネキマダラセセリが、稀にみられ、夕張岳が、本邦における南西限の産地となっていることは興味深い。森林限界上部では、クロマメノキ、コケモモ、ガンコウランを食樹とする、国指定の天然記念物カラフトルリシジミが生息する可能性があるが、未だ発見されていない。そのほかでは、環境庁の指標昆虫ヒメギフチョウが山麓部にみられ、特定昆虫では、ジョウザンシジミ、シロオビヒメヒカゲが、標高一、〇〇〇mの岩峰付近に稀にみられる。

環境庁選定の特定昆虫で蝶以外では、オサムシ科のオオルリオサムシが、ダケカンバ帯上部（一、三〇〇m付近）まで達し、同科のアイヌキンオサムシも多い。

アイヌキンオサムシは、国立科学博物館の石川良輔氏により、ユウバリキンオサムシとされ〔Procrustes Kolbei yubariensis ISHIKAWA〕の亜種名が与えられている。

森林限界上部を生活の本拠とする、いわゆる高山蛾の存在もみのがせない。夕張岳で発見されている高山蛾を列挙すると、アルプスヤガ、アルプスギンウワバ、ダイセツヤガであり、いずれも大雪山との共通種である。

さらに重要な記録として、小蛾類のミヤマウンモンヒメハマキ、ミヤマヒロバハマキが国内では夕張山地のハイマツ帯からのみ発見されている。前者は国外では、イギリス、ヨーロッパ、ソ連、中国（東北）にかけて分布し、夕張山地でも八月上旬に数匹が得られているだけである。後者は国外でもイラン北部のみから知られ、夕張山地では個体数は多いという。

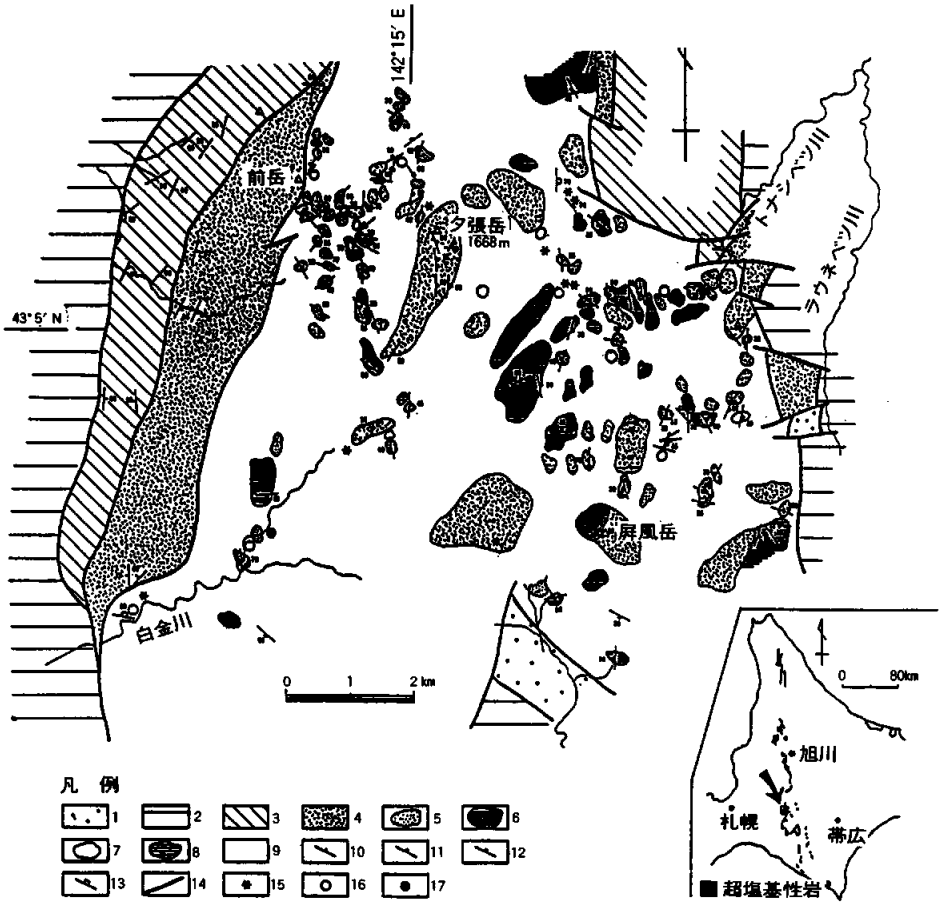
また、甲虫類の中にも極めて重要な記録がみられる。ユウバリメクラミズギワゴミムシ、ユウバリメクラチビゴミムシ、ユウバリチビゴミムシの三種はいずれも高山の石下などで生活しており、稀であるという。これらは、国立科学博物館による、日高山脈・夕張山地の総合的な生物調査が行われたことにより発見されたもので、夕張山地以外には知られていない。

直翅目においては、一九八四年に大雪山で発見され、一九八六年には利尻岳でも発見された、ダイセツタカネフキバッタが、夕張山地の芦別岳で記録されたことは特筆される。国指定の天然記念物ウスバキチョウと同様、氷河期の遺存種と考えられているバッタで、ナキウサギのように、夕張岳から発見される可能性は高い。なお、芦別岳から、一九三六年に朝比奈正二郎博士（国立衛生研究所）により国内から初めて発見されたクモマエゾトンボは、国外では北極圏にも分布するもので、その貴重さは、ウスバキチョウ等に匹敵するものであり、氷河時代の生き残りと考えられている。

夕張岳からは、今のところ見出されないが、ダイセツタカネフキバッタも同様に発見される可能性を秘めている。

夕張岳全景

図－1 夕張岳周辺における蛇紋岩メランジェの分布図（中川・戸田(1987)による）



1．第三紀層　2．白亜紀層　3．空知層群　4，塩基性岩(片岩)　5．珪質岩　6．泥質岩
7．砂質岩　8．石灰岩　9．蛇紋岩　10．走向傾斜　11．片理
12．蛇紋岩の剪断面　13．蛇紋岩の層状構造　14．断層　15．アンチゴライト含有蛇紋岩
16．アンチゴライトを含まぬ蛇紋岩　17．ブルサイト岩

以上述べたとおり、植物同様、昆虫の分野でも氷河期の遺存種が生息し、今後も発見される可能性の高い山として、夕張岳は、まだ、十分未知の魅力を秘めている山なのである。

❖夕張岳の地学的特徴

さてこのような特異な生物相をもつ夕張岳の地学的特徴を紹介してみよう。北海道の中軸をなす神居古潭変成帯はジュラ紀末～白亜紀の空知層群（主に緑色岩～輝緑凝灰岩）と日本最大の蛇紋岩体から構成され、これに種々の変成岩がともなっている。

夕張山脈はこの変成帯の中心に位置するが、その主列をなすのは、九〇〇～一三〇〇mのやや開析された平坦面で、ゆるい起伏をもちながら東側にゆるく傾斜する。この平坦面のつづきは芦別岳北方にも展開し、極楽平となる。この平坦面上に、夕張岳（一六六七・八m）、前岳（一五〇一m）、屏風岳（一二八〇・八m）などがそびえる。かつてこれは準平原面とその上に聳える残丘と考えられたが、中川充博士ら（Geology and petrology of Yubari-dake serpentine mélange in the Kamuikotan tectonic belt, central Hokkaido, Japan地質学雑誌九三、七三三～七四八、一九八七）によると、蛇紋岩地域は侵蝕され易く平坦になり、より堅硬な塩基性岩（片岩）や泥質岩、珪質岩、石灰岩よりなる変成岩ブロックが、風化に抗して残り、ガマ岩などの特異な地形を呈するにいたったと考えられる。

すなわちこれらのブロックは蛇紋岩にとりこまれたオフィオライト・メランジェであり、その大きさは数mから、最大では六kmにも及び、様々な形態を呈する。同氏らの地質図を図－1に示す。

またここで興味あることは、玄武岩の枕状溶岩は

堅硬で風化に堪え、夕張岳や前岳などを構成することである。枕状溶岩は海底火山で噴出した玄武岩溶岩が海水に接触し、特徴のある球状、枕状などの形をとるのであり、かつての海洋地殻の破片であることがわかる。したがってこれらの峰々が、オフィオライト・メランジェであるとされるのである。その最大の一つが夕張岳で、西から見るとカンチェンジュンガのような雄大な山容をもつ。その基盤は蛇紋岩などの超塩基性からなり、特異な植物群落をもつことは既に述べた。

❖リゾート開発の問題点

1　以上のべたように夕張岳、前岳周辺の平坦面は蛇紋岩よりなるため、その中の地すべり地帯が前岳と本峰の間で五ヵ所も数えられる（資料―道林務部治山課、地質調査報告）。この蛇紋岩崩土帯がまた貴重な高山植物の多い部分である。

その中に分布するガマ岩等の大きな岩（いわゆるオフィオライト・メランジェ）が、冬山では特に素晴らしい景観を提供し、スキー場計画のピーク（ゴンドラ等の終着駅）を、こうした岩場のあたりにもってこなければ本計画の意味がないとしているようである。

ここに二つの問題がある。第一に蛇紋岩の上に大きな構築物や、ゴンドラの支柱などを作ることは地すべりを誘発するおそれが大きい。とくに幅広く樹木の伐開を伴うとすれば、その危険性はさらに増大する。

第二に最も貴重な植物の自生するこの附近にスキー場のピークを持ってくるのは、自然生態系に及ぼす影響は、はかりしれないものがある。本計画では森林限界上部まで通年のゴンドラ、リフト等を設置するようであるが、現在の日本人の公衆道徳や自然保護観の低さ、夕張岳の標高から考察すると貴重な植生が完全に失われることは火をみるよりも明らかである。

2　夕張岳では一九六五年頃までに営林署によって一、〇〇〇ｍのレベルまで伐採されており、既に往時の面影を失っているが、このことをもって、一部では、今さら、自然保護云々でもなかろうという暴言さえも聞える。

これは、明らかに本末転倒であり、営林署のこうした行為に対し、地元自治体、市民として、強力に抗議を申し入れる程の姿勢が必要ではなかったのか。「北海道自然環境等保全条例」第三条では市町村の責務が明確に示されており、地元に、これほどの素晴らしい自然を抱えながら、今般、スキー場計画のような話が出ること自体、全く理解できないことである。

夕張川の水量が往時に比べ極端に少なくなったのは、気のせいばかりではなく、相当長期にわたる営林署による膨大な量の樹木の伐採を無視する訳にはいかない。下流域の水田地帯の水の需要量の増大と五六年に起きた大雨による洪水被害を調整するため大夕張ダムの嵩上げ計画があるが、これなどは、伐採と嵩上げのイタチごっこにならなければ良いが…。今でも、夕張岳周辺の伐採は続いており、網の目のごとくつけられた林道を車で走行してみると、その惨状がわかる。

3　夕張市の街の真中にあったシンボル的存在の冷水山の山肌を徹底的に削り、埋めてレースイスキー場を造成した時も、ホンの一部の人を除いては、市民の大多数が自然破壊をだまってみていたのはまぎれもない事実である。手稲山のスキー場計画に、札幌地区労も頑張ってきた事実と比較し、夕張が労働者の町であり、地区労が牛耳ってきた町であるのにその現実との断層は大きい。市議会でも奔走する観光行政に対し、環境保全上の見地から意見をのべてきたのはホンの一部の革新政党の人びとだけであった。

夕張市では今、レースイスキー場の買収、拡張計画も予定されている中で、地域に二つもスキー場が必要なのか、採算性はどうなのか、安全性はどうなのか、稼動期間は？　そして自然保護対策はどうなっているのか、声なき市民の問いに答えるだけのものを、まだ何も示していない。むしろ、市理事者は大規模リゾート計画では採算が合わなくてもよい。人が沢山きてくれる、そのことが大事なのだと言っているという。

4　夕張市では、第八次石炭政策の終わる一八九一年までに、市内には炭鉱が完全になくなることを予測して、今、この時期を、大規模プロジェクトを推進する、またとないチャンスであり、夕張岳スキー場計画も、夕張市の起死回生には、本プロジェクトしかないと宣伝につとめている。従って、中央政界の人間もとり込み、一気に押しまくり、政治的に結着させようというハラもあるようである。

5　国有林の伐採問題で話題となった知床は国立公園だが、夕張岳は、たかが道立自然公園であり、その比ではない。従って自然保護云々といっても、たいして問題にはならないという安易な考えが関係者の中にあるようで、貴重な夕張岳の自然をあまりにも知らないことに唖然たらざるを得ない。夕張の開発計画が関係者の意図する通りに進めば、大雪や美瑛等の開発も促進され、北海道の貴重な自然がどんどん失われてゆくきっかけとなるであろう。